

曇鸞の「是心作佛是心是佛」釈

——仏の三業莊嚴功德釈との関連について——

吉 水 岳 彦

一 はじめに

『往生論』には「相好の光一尋にして色像羣生に超えたり」という偈頌によつて仏の身業莊嚴功德が詠われている。曇鸞大師（以下尊称を略す）は『往生論』の注釈書である『往生論註』において、『観経』第九真身觀の「阿弥陀如来の身は高さ六十万億那由他恒河沙由旬なり。仏の円光は百億三千大千世界の如し」という文を用いて、偈頌中の「相好の光」を説明する⁽²⁾。ここで取りあげる問題は、身業莊嚴功德の偈頌が『観経』真身觀引用で説明し尽くされているにもかかわらず、その後更に阿弥陀仏の仏身に関する問題を孕む『観経』第八像想觀「是心作佛是心是佛」の文について問答を設け解釈している点である。この問答は『往生論註』上巻で仏八種莊嚴功德を説く中における唯一の問答であり、曇鸞は仏身の身業功德を説き示す箇所にかけている。本論文では、曇鸞が何を意図してここに『観経』「是心作佛是心是佛」を釈したのか

を、『往生論註』下巻所説の仏三業莊嚴功德釈と合わせ考え、述べていきたい。

二 曇鸞の「是心作佛是心是佛」釈

はじめに「是心作佛是心是佛」釈を読み解く上で重要な「法界身」の解釈から見ていきたい。『往生論註』には

言諸仏如来是法界身者法界是衆生心法也、以心能生世間出世間一切諸法故名爲法界、法界能生諸如来相好身亦如色等能生眼識是故佛身名法界身⁽³⁾

とある。衆生の心法（法界）は世間（世俗）・出世間（世俗を離れた仏の境界）のあらゆる事象を生起するものであり、眼界において「色」等の因縁が集まつて眼識を生起するように、諸々の如来の相好身を生起するとしている。また、

心想佛時是心即是三十二相八十隨形好者當衆生心想佛時佛身相好顯現衆生心中也、譬如水清則色像現水之與像不一不異、故言佛相好身即是心想也⁽⁴⁾

と述べて、色像を映しだす水のように、仏の相好身は衆生の心が映しだしたものであり、水と水に映る色像の關係と同様に、衆生の心とそこに映る仏の相好身を「不二不異」の關係としている。曇鸞はこのように衆生心（法界）において因縁生起する相好の身を「法界身」と捉えている。そしてこの法界身（三十二相八十隨形好を有する相好身）が、仏を想う衆生の心中に顯現する仏身であることを示している。⁽⁵⁾

次に「是心作佛是心是佛」について『往生論註』には次のようにある。

是心作佛者言心能作佛也、是心是佛者心外無佛也、譬如火從木出火不得離木也、以不離木故則能燒木、木爲火燒木即爲火也⁽⁶⁾

曇鸞は「是心作佛」とはこの心が仏を作することを指し、「是心是佛」とはこの心の外に仏はないことを意味するとしている。また、木（衆生の心）と火（仏の相好身）の両者が元から同一のものではなく、衆生の心という木は仏の相好身という火によって焼かれた時に仏となるとしていることが確認できる。つまり、「仏の淨化作用」があるからこそ衆生の心は仏なのである。⁽⁷⁾ いいかえれば、「淨化作用のある仏」が「衆生の心」において顯現している状態が「仏」である。このように曇鸞は喩えをもって仏と衆生の關係が二元的であつて離れず、「衆生の心」が仏の相好身によって「仏」たりえることを示している。

曇鸞は「是心作佛是心是佛」について以上のような見解を示した後に、衆生の心想到顯現する諸仏の「正偏知」についても解釈を行っている。それは、

諸佛正偏知海從心想生者正偏知者眞正知法界而知也、法界無相故諸佛無知也、以無知故無不知也、無知而知者是正偏知也、是知深廣不可測量故譬海也⁽⁸⁾

とあり、「正偏知」とは正しく法界に相應して知ることであると釈している。この法界は、仏が眞実清淨である為に依りどころとなる法そのものを指し、この法界をさとした諸仏は無知であつて一切を知る故に「正偏知」であるとしている。このような「正偏知」の解釈は、曇鸞が前述の仏の相好身を仏智の境界に基づくものとし、執着を有する「事相」ではなく、出世間に入つた上で表される「有相の仏身」としていたことを示している。⁽⁹⁾

以上のように、曇鸞はこの『觀經』「是心作佛是心是佛」の解釈を通じて、仏智の境界（法界・法相にかなつた智慧）にありながら相好を有する仏を説き示しているのである。

三 仏の三業莊嚴功德積

次に、仏智の境界における仏の相好を肯定的に解釈する『觀經』「是心作佛是心是佛」釈が、何故に身業功德成就において説かれなければならないかについて、身業功德成就

曇鸞の「是心作佛是心是佛」釈（吉 水）

の偈頌に対応する長行解釈を中心に考察を加えたい。

曇鸞は諸仏の三業功德について、

凡夫衆生以身口意三業造罪輪転三界無有窮已是故諸仏菩薩莊嚴身口意三業用治衆生虚誑三業也^⑫

といっている。凡夫衆生が罪を重ねて三界を出でることができないため、諸仏菩薩は身口意の三業を莊嚴して、その莊嚴した身口意三業をもつて衆生の虚誑の三業を対治するとしている。つまり曇鸞が、仏は罪を重ねて三界を出でることがない衆生に対応するために三業を莊嚴していると考えていたことがわかる。そのため、次のように衆生の虚誑三業対治についても具体的な見解を述べている。

云何用治衆生、以身見故受三塗身卑賤身醜陋身八難身流転身、如是等衆生見阿弥陀如来相好光明身者如上種種身業繫縛皆得解脱入如来家畢竟得平等身業、衆生以躁慢故誹謗正法毀訾聖賢捐痺尊長、如是之人応受拔舌苦鞠觀苦言教不行苦無名聞苦、如是等種種諸苦衆生聞阿弥陀如来至德名号說法音声如上種種口業繫縛皆得解脱入如来家畢竟得平等口業、衆生以邪見故心生分別、若有若無若非若是若好若醜若善若惡若彼若此有如是等種種分別、以分別故長淪三有受種種分別苦取捨苦長寢大夜無有出期、是衆生若遇阿弥陀如来平等光照若聞阿弥陀如来平等意業是等衆生如上種種意業繫縛皆得解脱入如来家畢竟得平等意業^⑬

ここで曇鸞は、衆生が身見という我執、憍慢というおごり、邪な見解によつて謗法や諸種の分別を為し、その結果様々な

苦の果報を受けるとしている。しかしながら、そのように自らの行業によつて苦の果報を受ける衆生であつても阿弥陀如来の相好光明身を見、その至徳の名号と説法の音声を聞き、平等の光照に遇つて平等の意業を聞くことができれば、身口意三業の繫縛より解き放たれて浄土に生ずることができるとするのである。そして往生した後は、その果報として平等の身口意業を得ることができると述べている。

以上のように、曇鸞は諸々の仏・菩薩が衆生の虚誑の三業に対応する三業を莊嚴しているのであり、阿弥陀仏も同様に自らの三業を莊嚴しており、衆生がそれを見聞したならば、その果報として浄土に生ぜしめると説くのである。

四 まとめ

『往生論註』における「是心作佛是心是佛」釈は、上述の通り仏智の境界にありながら相好を有する仏を説き示す一段であり、衆生の観見の対象となりうる相好を肯定する内容である。曇鸞はこれを上巻身業功德偈頌解釈に据えた後に下巻三業莊嚴功德釈において、衆生と仏の両者が三業によつて直接対応するからこそ衆生は清浄化されると説いている。また、上巻の身業功德釈並びに下巻三業莊嚴功德釈前半においては、主語が「諸仏」となっており、諸仏の功德として解釈されている。これに対し、三業莊嚴功德の具体的内容を説く一

段においては、阿弥陀仏に相好光明身があつてこそ衆生の虚誑の三業が清浄化されるのであるとして、「阿弥陀仏」の功德を説いているのである。これらのことを勘案するならば、曇鸞が衆生に見聞可能な阿弥陀仏の仏身を説く前提として「是心作佛是心是佛」釈を身業功德のところに設け、仏身が衆生に縁遠いものではないことを示そうとしたことが推察されるのである。

(紙面の都合上、詳細な検討は別稿に譲りたい)

- 1 『浄全』一卷一九二頁
- 2 『浄全』一卷二三〇頁下、二三二頁上
- 3 『浄全』一卷二三二頁上
- 4 『浄全』一卷二三二頁上
- 5 柴田泰氏も「中国浄土教と心の問題―『観経』「是心作佛是心是仏」理解―」(『仏教思想』9号、一九八四年) 四一五頁において「法界身」を「相好身」としている。
- 6 『浄全』一卷二三二頁上
- 7 福原隆善氏「仏と衆生―『観経』の「是心」釈をめぐる―」(『浄土宗学研究』第七号所収、一九七二年) 一一二頁参照。
- 8 『浄全』一卷二三二頁上
- 9 この「正偏知」の説明の文が仏所得の「法」である阿耨多羅三藐三菩提の説明文(『浄全』一卷二五五頁上) とほぼ同様であり、その内容からここでの「法界」の意味が「法相」「法性」と同義であることが考えられる。

曇鸞の「是心作佛是心是佛」釈(吉水)

10 ここでの「無相無知」は藤堂恭俊氏の指摘(『国訳』諸宗部五、四四頁、註三〇)の通り、『肇論』般若無知論第三(『正藏』四五卷一五三頁a)の影響と考えられ、「無知」が非常に高い境地であり、「有知」「無知」を越えた絶対的な知とするところが妥当であろう。

11 曇鸞が浄土や仏身に勝義の有相(無分別後智)を想定していたことは、藤堂恭俊氏「無量寿経論註に説示せられる佛身土に關する見解」(『仏教文化研究』二号、一九五二年)や曾根宣雄氏「仏辺と機辺について」(『仏教文化学会紀要』第十二号、二〇〇三年)等による指摘がある。

12 『浄全』一卷二四六頁下

13 曇鸞は「応知者応知此三種莊嚴成就由本四十八願等清淨願心之所莊嚴因淨故果淨非無因他因有也」(『浄全』一卷二五〇頁上)と述べて、浄土及び仏身の勝義性を仏の願心に託して説いている。

14 『浄全』一卷二四六頁下

15 良忠や深励等、先学にならない「入諸佛如来家」は『観経』「生諸佛家」(『浄全』一卷五一頁)と同様に浄土に生ずることと解釈した。

〈キーワード〉 曇鸞、『往生論註』、是心作佛是心是佛、仏身仏土

(大正大学大学院)

pāramitopadeśa, in which bodhisattvas are born in this world in order to enlighten all sentient beings, also informs its philosophical background.

14. On Tanluan's Interpretation of “*shixinzuofu shixinshifo* 是心作佛是心是佛”: In relation to the Buddha's interpretation of “*sanye zhuangyan gongde* 三業莊嚴功德”

Gakugen YOSHIMIZU

I discuss Tanluan's interpretation of “*shixinzuofu shixinshifo* 是心作佛是心是佛” in the *Guan jing* 觀經 in relation to the Buddha's interpretation of “*sanye zhuangyan gongde* 三業莊嚴功德.” I believe that the interpretation of “*shixinzuofu shixinshifo*” in Tanluan's *Wangsheng lunzhu* 往生論註 is a premise of the explanation, in which the body of Amida Buddha is visible to all sentient beings. I also believe that Tanluan tried to explain that the body of the Amida Buddha is not far from all sentient beings.

15. Shandao and the State

Kazuhisa TSUMEDA

Traditional studies conclude that Shandao's Pure Land Buddhism has the character of State Buddhism. But when we analyze the text of the *Fashi zan* in detail, another conclusion follows inevitably from our analysis. In the text of the *Fashi zan* (T47, p.483a), Shandao prayed for the happiness of the Crown prince and the women in the seraglio. They were suffering under the tyranny of the Empress Wu. Considering the historical situation, Shandao's words in the text of the *Fashi zan* are not to be read as depicting the character of State Buddhism but rather as his remonstrance against Empress Wu.

16. On the ‘Four Interpretations’ of the *Fahua wenju*

Hiroshi KANNO

This paper reconsiders the applicability of Shun'ei Hirai's critical assess-